

羅什訳『法華經』の語学的研究

—仮定表現を構成する接続詞について—

椿 正美

0. はじめに

鳩摩羅什 (Kumarajiva) 訳『妙法蓮華經』全7巻28品 (以後は略称『法華經』を使用) の文中では、相手に物事を伝える際に仮定の状況を設定する手法も多く見られる。この仮定表現は、仮設された内容の冒頭に特定の接続詞を置くことによって構成され、それに対する結果や結論を示す部分との間に条件関係(「もし～すれば」)または譲歩関係(「たとえ～ではあっても」)を成立させる。前者では「化城喻品」“若入是城、快得安穩 (「若し是の城に入りなば、快く安穩することを得ん」)。”、後者では「葉王菩薩本事品」“我雖作是供養、心猶未足 (「我是の供養を作すと雖も、心猶未だ足らず」)。”が例として挙げられる。

仮定表現によって比喩の部分を設定する手法は、記述の内容に強い説得性を加えるものであり、特に書き手自身の主張や読み手に対する戒めを表現する上では大きな効果を發揮する。「譬喻品」に「諸有智者、以譬喻得解。(「諸の智あらん者、譬喩を以て解ることを得ん」)。」とあるように、その表現は『法華經』でも有効的な表現手段と認められ、全文中で頻繁に使用されている。

本論では、『法華經』文中に見られる接続詞“若”“設”“雖”“假使”“正使”の用例を調査対象とし、それによって構成された仮定表現の使用条件や効果について、漢語古典文法の立場から探っていく。

1. “若”

1. 1. 条件関係成立の表示

“若”の字形は、『説文解字』に“從艸右、右手也 (「艸右に従ふ、右は手なり」)。”とあり、“艸”は伸ばした手、口は祝禱を収めた器を意味することから、両手を差し伸べて神託を受ける者やその状態を示す象形と捉えられる。転じて「(神に) 従う」を表し、借りて「しなやかに従う」「軟らかく従う」等の意にも用いられ、仮定表現「もし～ならば」の構成にも応用されたと考えられる。『法華經』全文中に見られる仮定表現の例では、“若”が前置されたものが最も多く、全ての用例で条件関係が成立している。

“若”の機能については、王力1962b: 603が「仮設」の表示と記している。例えば『史記』「白起王翦列伝」“趙若受我、秦怒必攻趙 (「趙若し我を受けば、秦怒りて必ず趙を攻めん」)。”では、“趙”の行為を表す“受我”が仮定の内容に当たり、その部分と“秦怒必攻趙”との間に条件関

係が成立している。

『法華經』文中に見られる例文を次に挙げる。

(1) T09-0012C¹⁾

我及諸子、若不時出、必為所焚。(譬喻品)

我及び諸子、若し時に出でずんば、必ず焚かれん²⁾。

(2) T09-0023A

若我等得仏、衆生亦復然。(化城喻品)

若し我等仏を得ば、衆生亦復然ならん。

(1)では“不時出”、(2)では“得仏”が仮定の内容に当たり、その主体は共に“我”を含む複数の存在者になる。何れの場合でも、“若”は仮定の内容と予想される状況の描写との接続に用いられ、両者間では条件関係が成立している。

このように初めに表述される文が後に表述される文の条件に当たる複文の関係について、牛島1967:366は「連関」と呼称し、それぞれの文が並列的または対照的に表述される「接続」と区別している。『法華經』全文中に於ける“若”を含む複文の用例では、前部と後部の間に成立する関係は全て「連関」に当たる。

1. 2. 命令文への応用

“若”が用いられた仮定表現の中には、相手に対する命令または禁止を目的として掲示されたものもある。『法華經』文中に見られる“若”使用例では、この形式によるものが圧倒的に多い。そのような例文を次に挙げる。

(3) T09-0037B

若為女人說法、不露齒笑。(安樂行品)

若し女人の為に法を説かんには、齒を露わにして笑まざれ。

(4) T09-0038A

若有難問、隨義而答。(安樂行品)

若し難問することあらば、義に随って答えよ。

(3)では“為女人說法”、(4)では“有難問”が仮定の内容に当たり、(3)では禁止、(4)では命令を発するために仮設された内容として掲示されている。共に文の後部では対処すべき内容が記され、前部との間に条件関係が成立している。

高名凱1957:493によれば、漢語の命令命題の中で語気によって表現するものは「強制的命令」と「非強制的命令」に分類され、“若”の前置による仮定表現を含む命令文は後者に含まれる。その命令形式には「請求式」と「勧告式」があり、何れの形式も『法華經』文中では戒めを表現する部分で効果を發揮したと捉えられる。

1. 3. 時間や人物の描写

“若”が用いられる仮定表現には、仮定の内容を表す部分に体言が後置された形式も存在する。『法華経』全文中では、時間を示す語彙または人物を示す語彙が後置された形式が多く見られる。次に例文を挙げる。

(5)T09-0037C

若説法時、無得戲笑。(安樂行品)

若し法を説かん時には、戲笑すること得ることなかれ。

(6)T09-0046B

若能随喜者、為得幾所福。(随喜功德品)

若し能く随喜せん者は、幾所の福をか得べき。

(5)では“説法”に“時”、(6)では“能随喜”に“者”が後置され、それぞれに仮設された時間や人物の内容が明示されている。更に冒頭に“若”が置かれ、仮定表現として成立している。

黎錦熙1992: 219は、仮定表現の例として、仮設された時間の内容を表す部分に“時”が後置された形式を挙げ、その場合の“時”は条件の制限にも当てられると指摘している。これに基づけば、(5)に掲示された時間帯は、“時”の補足により範囲が限定され、更に“若”が前置されて程度の強い命令文が構成されたと解釈できる。

但し、この表現では、時間や人物を示す語彙が省略された形式も使用されている。例えば、『見宝塔品』“若有能持、則持仏身(「若し能く持つことあるは、則ち仏身を持つなり」)。”の場合、本来ならば“有能持”に人間を表示する部分が後続する筈であるが、ここでは省略されたと考えられる。

2. “設”

2. 1. 条件関係と譲歩関係の成立

“設”の字形は、『説文解字』に“從言殳、殳使人也(「言殳に従ふ、殳は人を使ふなり」)。”とあることから会意と捉えられる。白川1996: 934は、“殳”が呪飾を持つ形を表すことから、“設”は「祭祀の場を設定することを示す字であろう」と述べている。

また、字義については、『説文解字』に“施陳也(「施陳するなり」)。”とあることから、陳設を示すと考えられ、王力1962a: 223も“設”の機能を「仮設」の表示と記している。例えば『史記』「魏其武安侯列伝」“設百歳後、是属寧有可信者乎(「設し百歳の後、是の属寧んぞ信すべき者有らんや」)。”では、やがて訪れる“百歳後”の揭示に“設”が用いられ、その時期に“可信者”が不在となる可能性について記述されている。ここに見られる“設”の機能は、時間帯の仮設に対する表示と捉えられる。

『法華経』文中では、“設”の使用回数は非常に少ない。発揮される機能には、条件関係と譲

歩関係の両方の表示が含まれる。それぞれの例文を次に挙げる。

(7) T09-0015C

設服良薬、而復増劇。(譬喩品)

設い良薬を服すとも、而も復増劇せん。

(8) T09-0029B

設得授記、不亦快乎。(授学・無学人記品)

設し授記を得ば、亦快からずや。

(7)では“服良薬”が仮定の部分に当たり、そのような状況下にあっても形成される結論として後部に“復増劇”が続いている。ここに成立する関係は譲歩である。これに対し、(8)では“得授記”が仮定の部分に当たり、予想される結果を示す“快”との間には条件関係が成立している。但し、このように条件関係を示す形式は、『法華経』文中では用例が僅かである。

牛島1967:256は、接続詞に対して漢語文法での専門用語である連詞という呼称を用い、詞と句、句と詞、句と句を接続して文の各種成分を形成し得る構成連詞、複数の述語成分を接続して両者間の相関関係を明らかにする関係連詞に分類し、仮定表現を構成して条件関係と譲歩関係の成立を示す“設”は関係連詞に属している。更に、関係連詞の位置には、二つの述語成分の間に介在される場合と述語成分の冒頭に前置される場合があり、“設”の位置は後者に当たる。

2. 2. “若”との連用

『法華経』文中では、条件関係を示す“若”と譲歩関係を示す“設”とが連用された例も見られる。そのような例文を次に挙げる。

(9) T09-0045A

若復行忍辱、住於調柔地、設衆惡來加、其心不傾動。(分別功德品)

若し復忍辱を行じて、調柔の地に住し、設い衆の惡來り加うとも、その心傾動せざらん。

(10) T09-0056C

若有持是、觀世音菩薩名者、設入大火、火不能燒。(觀世音菩薩普門品)

若し是の觀世音菩薩の名を持つことあらん者は、設い大火に入るとも火も焼くこと能わじ。

(9)の場合、まず前部で“若”の前置により“復行忍辱、住於調柔地”が仮設されている。更に、後部で“設”の前置により“衆惡來加”が仮設され、結果の部分“其心不傾動”との間に譲歩関係が成立している。(10)の場合も同様の形式が構成され、“若”による条件関係の表示、“設”による譲歩関係の表示の二重構造が成立している。

(10)と同じ「観世音菩薩普門品」には、他に“若有女人、設欲求男、礼拝供養、観世音菩薩、便生福德智慧之男（「若し女人あつて、設い男を求めんと欲し、観世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德智慧の男を生まん」）。”の部分がある。全体の文意から見れば、この場合の“設”の機能は条件関係の表示と解釈されるため、(9)(10)に見られる譲歩関係とは形式が異なると判断される。

3. “雖”

3. 1. 仮定条件の表示

“雖”の字形は、『説文解字』に“從虫唯声（「虫に從ふ、唯の声」）。”とあることから会意形声と捉えられる。文中では仮設を示す部分に前置されて「～といえども」を意味し、そのような状況下でも形成される結果の説明が後に続き、両者の間には譲歩関係が成立する。例えば『論語』「子路」“其身不正、雖令不從（「其の身正しからざれば、令すと雖も從はず」）。”では、“令”が仮定の内容に当たり、想定される結果の表示“不從”が後に続いている。

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(11) T09-0034A

雖説此等、未足為難。（見宝塔品）

此れ等を説くと雖も、未だ難しと為すに足らず。

(12) T09-0048B

持是經者、雖住於此、亦聞天上、諸天之香。（法師功德品）

是の經を持たん者は、此に住せりと雖も、亦天上諸天之香を聞がん。

(11)では“説此等”が仮定の内容に当たる。本文では、直前の部分に“諸余經典、数如恒沙（「諸余の經典、数恒沙の如し」）。”とあるので、“此等”の指示対象は“諸余經典”と解釈される。その後には、予想される結果として“未足為難”が続き、譲歩関係が成立している。(12)では“住於此”が仮定の部分、“聞天上、諸天之香”が結果の部分に当たる。

白川1996：886は、“口”が祝祷を収めた器、“隹”（鳥占）が神託を求めることを意味することから、“唯”の部分に神意と解釈している。更に、呪詛を意味する“虫”が置かれることにより停止条件が加えられて逆接態となり、“雖”全体の意味は「いえども」になったと述べている³⁾。

3. 2. 確定条件の表示

『法華経』文中に見られる“雖”には、既に発生している状況の描写部分に前置させる用法も見られる。この形式で設定される条件は、仮定ではなく確定と判断される。

確定条件の表示と判断される例文を次に挙げる。

(13)T09-0043A

是故如来、雖不実滅、而言滅度。(如来寿量品)

是の故に如来、実に滅せずと雖も、而も滅度と言う。

(14)T09-0047C

雖未得天眼、肉眼力如是。(法師功德品)

未だ天眼を得ずと雖も、肉眼の力は是の如くならん。

(13) “不実滅” と(14) “未得天眼” は、現実には発生している状況を描写し、それにも屈せず形成された結果として(13) “言滅度” と(14) “肉眼力如是” が後に続いている。何れの場合でも、揭示された条件は既に確定された内容を表し、その部分と結果を示す部分との間には譲歩関係が成立している。

黎錦熙1992:223は、譲歩を示す連詞（接続詞）を認容連詞と推宕連詞に分類し、前者は事実上の容認の表示、後者は心理上の拡張の表示に重きを置いている。この分類では“雖”は認容連詞に含まれるが、それは(13)(14)に見られるような確定条件の表示機能が重視されたためと考えられる。

4. 複合語

4. 1. “仮使”

仮定を表現する接続詞は、複合語として使用される場合もある。太田1958:335は“仮使”を例として挙げ、「使」はがんらい使役をあらわすものであるが、これが仮定に転じたもの」とし、「仮」と「使」が複合したものは古くからある」と述べている。

“仮”の旧字“假”の字形は、『説文解字』に“従人段声（「人に従ふ、段の声」）。”とあることから形声と捉えられる。字義については“真非也（「真に非ざるなり」）。”とあるように、複合語“仮使”は真実から離れた仮設を示し、結果を表示する部分との間に譲歩関係を成立させている。

例えば『史記』「范雎蔡澤列伝」“仮使臣得同行於箕子、可以有補於所賢之主、是臣之大榮也（「仮使臣、行ひを箕子に同じうするを得ても、以て賢とする所の主に補ひ有るべくは、是れ臣の大榮なり」）。”では、仮定の行動を表現する“臣得同行於箕子”の部分に“仮使”が前置され、以下の部分との間に譲歩関係が成立している。

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(15)T09-0006A

仮使満世間、皆如舍利弗、尽思共度量、不能測仏智。

仮使世間に満てらん、皆舍利弗の如くにして、思いを尽くして共に度量すとも、仏智を測ること能わじ。

(16) T09-0053B

仮使国城、妻子布施、亦所不及。(藥王菩薩本事品)仮使国城・妻子をもって布施すとも、亦及ばざる所なり。

(15)では“満世間…尽思共度量”、(16)では“国城妻子布施”が仮定の内容に当たる。それぞれ後部では予想される結果について記され、譲歩関係が成立している。

森野1983:79は、六朝時代(222-589)に著わされた『搜神記』『世説新語』等の古小説または訳経に使用された複合語について調査し、「仮設」を示す語彙の中で“仮使”“仮令”“設令”等は古小説と訳経の両方に使用されたと報告している。この調査結果は、“仮使”は特に仏典翻訳のために作成された語彙ではなかったことを示している。

4. 2. “正使”

『法華経』文中では“仮使”と共に“正使”の使用も認められる。“正使”は使用条件が“仮使”と同じく、やはり譲歩関係の成立を示す。

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(17) T09-0006A

正使満十方、皆如舍利弗、及余諸弟子、亦満十方利、尽思共度量、亦復不能知。(方便品)

正使十方に満てらん、皆舍利弗の如く、及び余の諸の弟子、亦十方の利に満てらん、思を尽くして共に度量すとも、亦復知ること能わじ。

(18) T09-0010A

正使出于世、説是法復難。(方便品)

正使世に出でたまえども、是の法を説きたもうこと復難し。

(17)では“満十方、皆如舍利弗・・・尽思共度量”が仮定の内容に当たり、結果について記された“不能知”との間に譲歩関係が成立している。(17)の部分は、本文中では(15)の部分の直後に位置し、それぞれ全文を構成する語彙の配列が酷似しているので、(17)“正使”は(15)“仮使”と同様の効果を發揮したと考えられる。

(18)では“出于世”が仮定の部分に当たり、結論について記された“説是法復難”との間に譲歩関係が成立している。

5. おわりに

『法華経』文中では、読み手に対する命令や忠告の表現に説得性を加えるため、適切な接続詞を配して仮定表現が構成された部分が多く見られる。しかも、書き手が文面から直接的に発する内容だけでなく、主体の発言や行動の描写を通じて間接的に訴えた内容も多く含まれ、結

果として仮定表現を構成する接続詞の使用は広範囲に及んでいる。

更に、接続詞が条件関係や譲歩関係を成立させる機能は、それぞれの字義との間に密接な関係があることも分析により判明した。例えば、“若”の場合は、神託の受け取りを描写することから従属を意味して仮設の表示に応用され、結果を示す部分との間に条件関係を成立させている。また、“雖”の場合は、神意を意味する本体に呪詛を意味する部分が付加されて停止条件が形成され、譲歩関係を成立させている。その中で条件関係を示す接続詞には、“設”その他の使用も確認されるが、調査の結果、“若”の使用が最も多いことが確認された。

結論として、以上のように仮定表現を構成する接続詞の使用条件や効果は、『法華経』全体の文意を理解する上で重視されるべきものと認められる。

〈参考文献〉

- 牛島徳次1967.『漢語文法論（古代編）』大修館書店。
 王力1962a.『古代漢語（第一冊）』中華書局。
 王力1962b.『古代漢語（第二冊）』中華書局。
 太田辰夫1958.『中国語歴史文法』江南書院。
 高名凱1957.『漢語語法論』科学出版社。
 白川静1996.『字通』平凡社。
 森野繁夫1983.「六朝訳経の語法と語彙」, 東洋哲学研究所『東洋学術研究』第22巻第2号：66-81頁。
 黎錦熙1992.『新著国語文法』商務印書館。

〈注記〉

- 1) 本論で引用された例文には、『大正新脩大蔵経』（全83巻、1925年7月発行、1988年2月普及版発行、大正新脩大蔵経刊行会）文中での使用箇所を示す記号を付す。最初のTは「大正」、数字は巻数と頁数、最後のA～Cは段数を示す。
- 2) 各例文の直後には、参考のため『訓訳妙法蓮華経并開結』（井上四郎編輯、平楽寺書店、1957年1月発行）に書かれた書き下し文を付す。
- 3) 白川1996：886は、“雖”の字義について、『説文解字』には“似蜥蜴而大（「蜥蜴に似て大なり」）。”とあり、虫の名と説明されているが、実際にはその用義例がないことも指摘している。

〈キーワード〉

接続詞 仮定表現 条件関係 譲歩関係